2023年6月4日　朝 礼 拝 順 序 (午 前 10 時 半)　(№23)

司式　杉山昌樹牧師

前　奏　奏楽　杉山友実子姉

開 会 招 詞　詩編95編1－7節

＊ 賛 美 歌　3:1（ソングシート）

1. ちからの主を　ほめたたえまつれ　わがこころよ、今しも目さめて、
たてごと　かきならしつつ　御名をほめまつれ。　アーメン

＊ 開 会 祈 祷
罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　戒　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛 美 歌　３：２（ソングシート）

2. すくいの主を　ほめたたえまつれ　みことばもて　わが身をはげまし、
なやみに　かたしめたもう　みいつたぐいなし。アーメン

公 同 の 祈 祷　19　聖霊降臨節 第二主日 三位一体主日

父と子と聖霊の、三つにして一つなる、活けるまことの神さま、あなたは、愛と力と栄光に満ちた、大いなる神であることを告白します。

復活の主イエスは、弟子たちに現れ、全ての民に福音を宣べ伝えて、キリストの弟子とし、父と子と聖霊の名によって洗礼を授けよと命じられました。
わたしたちは、主イエスが命じられたことを、すべて守ることによって、三つにして一つなる神の、愛の交わりの中にいることができますように。今も後もとこしえに。アーメン。(マタイ28、I ヨハネ1、「聖霊」四)

献　　金　　（黒）教会活動・（赤）東北伝道　　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

聖　書　朗　読　　創世記17章4－14節（旧約聖書21頁）

フィリピ3章1－6節（新約聖書364頁）

説　教・祈　祷　「喜びのわけ」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　７９:１，２（ソングシート）

1. キリストにはかえられません　世の宝もまた富もこのおかたがわたしに　代わって死んだゆえです。(おりかえし)　世の楽しみよ去れ、世のほまれよ行け。キリストにはかえられません、世の何ものも。

2. キリストにはかえられません　有名なひとになることも　ひとのほめることばも　このこころをひきません　(おりかえし)

聖　餐　式　（讃美歌２０５番1－３）

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６７

主イエスのめぐみよ、ちちのあいよ、みたまのちからよ、あぁみさかえよ。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　（黙祷）

報　　告 司会加藤良明長老・受付古澤兵庫長老（次週：那珂百合子・加藤良明長老）

礼拝当番/献金当番　若月証、伊藤幸紀/八児慶汰、堀口恵理（次週）杉山陽一、堀口有希/横山芽愛、横山遥音

本日　受付　１階：那珂信之執事　２階：大日南隆夫執事 ／ZOOMホスト・録音：大日南信也

次週　受付　１階：佐藤紀子執事　２階：森永美保執事 ／ZOOMホスト・録音：大日南悠

フィリピ3：1－6「喜びのわけ」

三位一体主日？

今日の週報の右上に三位一体主日と書いてあります。先週、聖霊が使徒たちに与えられたことを記念してペンテコステを祝いました。その次の週である今日から、教会はいわば平常運転に入ります。そして、教会の暦としては、クリスマスに備える、アドベントから次の年度、という数え方になります。11月末ごろで一年が切り替わるわけで、ちょっと浮世離れしていると感じなくもありません。でも、実は、教会にとっては、このちょっとこの世とは違う、というのがミソです。教会の平常運転は、この世とは違ったところがあるのです。それを最も特徴づけているのが、今日の聖書の最初にあります「喜んでいなさい」という言葉です。この手紙を書いたパウロという人の言葉です。そしておそらく、これはパウロという人自身が喜んでいる、そこから出てくる言葉です。

喜びのアイドリング

それで話が少し変わりますけれども、最近の家電製品は、スイッチを切っても何かしら、動いているような気がします。昔の扇風機などは単純なもので、スイッチを切りさえすれば、もう、うんともすんとも言わなかったものですけれども、最近はテレビでもなんでも、コンセントを抜かないと、完全に消えてくれなかったりします。でも、この完全に消えない、というのが大事なところで、先ほど、パウロは「喜んでいなさい」と言ったんですと、お伝えしました。そこでこの喜んでいなさい、という言葉に、何もくっついていない、というところに目を止めたいのです。普通に考えますと、お小遣いもらって嬉しかった、とか、誰々さんと会えて、嬉しかった、と理由があって、喜ぶわけです。しかし、ここでは、「喜ぶ」理由は特に書いていないのです。書いていないのに、喜んでいるのです。いわば、喜んでいるのが当たり前、喜んでいるのが普通、スイッチが入っていようといまいと、いつでも喜んでいる、最近の家電がいつでもスタンバイしているように、もう、最初から喜びスイッチが入っている、これがキリスト者の当たり前なんだ、こうパウロは言っているようなのです。

もう一度とは？

そしてパウロは、このように、喜んでいなさい、と言った後で、いきなりグイっと、「もう一度言う」と続けています。この場合に、もう一度言う、とは何をもう一度言うのか、例えば、「喜ぶ」ということでしたら、2章18節でも「同様にあなた方も喜びなさい」と言っていましたら、このことか、と思えます。フィリピの信徒への手紙は別名「喜びの手紙」ともいわれていますから、そのように繰り返し「喜べ、喜べ」何度でもいおうじゃないか、と言っていると理解できなくもないのです。けれども、ここでは、この「もう一度言う」という言葉に、「私には煩わしいことではなく、あなた方には安全なことだ」、と続いています。これは逆から言いますと、もう一度でも、何度でも、とにかく言っておかないと、安全じゃない、と言っているようにも見えます。おそらく、パウロは心配していることがあります。それで、これは、とにかく大切なことだから、何度でもいう、というようにして、注意の言葉を語り始める、というのが今日の所のようなのです。教会の礼拝で語りますお話を説教と言いますけれども、その意味では、本当の意味で今日の個所はパウロ先生のお説教、こうしなければ大変なんだぞ、というような話なのです。

三重の注意

それで2節ではいきなり、パウロによる注意の言葉が、三回続いています。ちなみに、この所では、「注意しなさい」、「気を付けなさい」、「警戒しなさい」というようになっていますけれども、これは、元のギリシャ語を見ますと、全部「注意しなさい」という同じ言葉です。それも、元々は「見る」「用心する」と言った意味にもなる言葉です。そうしますと、これはもう、最大限、注意していなければならない、ということです。これをしたらダメ、絶対というくらい強い言葉です。それで何を注意するのか、というと、ここでは、最初に犬ども、といきなり失礼な呼び方がされています。それに続いて、あのよこしまな働き手とあります。これは、おそらく、律法主義的なキリスト教伝道者たちのことのようです。彼らが主張していたのは、救いのために、割礼、という旧約聖書に書いてある、伝統的な神様の民のしるしについての事柄です。もっと具体的には、朝っぱらから恐縮ですが、生まれて八日目の男

の子の赤ちゃんのあそこの皮の先をちょっと切ってしまう、というものです。これらに注意しろ、とパウロはいうのです。では一体割礼や律法の何が問題なのでしょうか。

割礼の意味

　それで、ちょっと長いのですけれども、割礼について書いてある創世記を開いて読んでみます。「アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。　わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。」…わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」神はまた、アブラハムに言われた。「だからあなたも、わたしの契約を守りなさい、あなたも後に続く子孫も。あなたたち、およびあなたの後に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの間の契約のしるしとなる。いつの時代でも、あなたたちの男子はすべて、直系の子孫はもちろんのこと、家で生まれた奴隷も、外国人から買い取った奴隷であなたの子孫でない者も皆、生まれてから八日目に割礼を受けなければならない。」

　ここで、いくつかカギになる言葉があります。一つは「まったきもの」です。そのままとれば、「完全な人」です。でも、ここで言われている「完全な人」とは、スーパーマンのようであれ、ということではありません。むしろ、神様の契約の中にい続ける人です。そして、この契約という言葉も、日本では堅い商売の言葉のように感じますけれども、どちらかと言いますと、「友情」、「堅い友情」とでもいったほうがぴったりくるようです。そうするといつまでも神様と友でいよう、という意味です。そこで問題となるのは実態です。心の中身です。そのような心の中身を目に見えるようにしたのが、割礼というしるしです。こう考えてみますと、割礼自体は悪いものではないように思えます。けれどもパウロはそれではダメだ、と言います。

パウロ豹変する

　それは、パウロ自身が、ある時、割礼や律法を頼りにしていく方向ではだめだと、気づかされたからです。そのような気づきの様子は、具体的には、使徒言行録の彼の回心のところに描かれています（9：1～、22：6～、26：12～）。今日は詳しくは見ませんけれども、まさに青天のへきれきとでもいうことがありました。突然、強い光に取り囲まれ、イエス様に直接語り掛けられるということがありました。そして、目が見えなくなってしまいます。しかし、その後、パウロの世話をするようにと神様から遣わされたアナニアという人が手を置いて祈ってくれた時に、目からうろこのようなものが落ちた、というように描かれています。もちろん、これは彼の中で大転換があった、ということです。それで、パウロがどう変わったのか、ということにつきましては実はこのフィリピ書ですと7節以下、来週読むところに詳しく書いてあります。しかし、今日は、先ほど読みました3節の言葉からパウロがどう変わったかを確かめてみます。それで改めてこの個所を読んでみます。「彼らではなく、わたしたちこそ真の割礼を受けた者です。わたしたちは神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです。」（3：3）。

何に頼るか

　ここでは、四つのことが並んでいます。改めて読んでみますと「真の割礼」、「霊による礼拝」、「キリスト・イエスを誇りとする」、「肉に頼らない」という順番です。それでまずは、最後の肉に頼らない、という言葉について考えます。パウロの以前の生き方は、この逆でした。肉に頼っていたのです。私たちも、この世で生きていますと、仕事などで出会った人に、色々なことを自慢されたりします。あるいは、自分自身でも、これができる、とか、こんな資格を持っている、こんな学校を卒業した、コレコレの家の生まれだ、と言ったようなことを心の支えにしてしまっているところがどこかしらあるかもしれません。そして、そういったことで言うと、実は、恥ずかしながら、自分も自慢することは山ほどある、とパウロは言うのです。先祖代々のイスラエル人、それもベニヤミンという良い部族の出、ま

さにイスラエル人の中のイスラエル、しかも信仰の実践もしっかりして、とこのところの5，6節に書いてあります。これらのことは全部肉のこと、自分自身がどういうもので、何をしているか、ということです。そこに確かさを求めいてたというのです。自分が素晴らしければ大丈夫、ということです。しかし、その場合、自分の確かさで生きていくのですから、実は神様とは関係ない生き方ということになります。何しろあてにしているのは自分ですから。

キリストを誇りとする

しかし、パウロは今は、もう、それをやめたと言います。ではどうするのか、実はすでに1章でこんなことが言われていました。「キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇り」（1：26）。これはフィリピの人たちのことを言っている言葉ですけれども、パウロにとっても同じです。イエス様と結ばれていることが誇りだ、というのです。私が誇るのは、もう自分じゃない、イエス様だ。私が生き生きするのは、イエス様と結ばれているからだ、というのです。それは、同時に、いつでもイエス様を頼りとする、ということにもなります。わたしたちがこの人生を生きていく、その時々に何を心の支えとしていくか、それは、自分が、あれができて、これができて、ということによってではない、むしろ、自分のために、いつでもイエス様がいて下さる、それをあてにする、というのです。そして、そのように私たちの中にイエス様がおられる、いつも変わらず、いて下さるということを確かめる場が、神の霊による礼拝だ、というのです。

霊によって礼拝する

今日は三位一体主日です、と最初に言いました。今日から教会は平常運転です、と言いました。その場合の平常運転の中身は、三位一体という言葉そのものに現れています。今、イエス様は、父なる神さまと一緒に天におられます。そこから、私たちを助ける、また私たちに神様とイエス様のことを教えてくれる、助け手である聖霊なる神が送られてきます。三位一体の礼拝とはこのことです。私たちは、この意味で、いつでも、神様とイエス様とつながっています。そのように、霊によって、神様こそが最も確かな友達であることがわかる、それがこの毎週の礼拝です。だからこそ、パウロは、それ以外のものに目を向けるな、注意せよ、こういったのです。

喜びのわけ

このような礼拝の中にい続けること、それこそが最初にお話しした、いつも喜んでいる状態、いつでもスイッチが入っている状態です。何しろ、いつでも神様と、そしてイエス様と一緒で、その友情がわかるのですから、基本的に喜ばしいのです。特別にうれしいことがなくても、むしろ、嫌なことがあっても、基本的にうれしいのです。喜んでいるのです。わたしたちに対して、パウロが「喜んでいなさい」と一見無茶に見える命令を語れるのは、ただ、この事のためです。自分を当てにするのではないありかたにおいて、わたしたちは、たえず喜んで生きていくのです。

祈り

父なる神さま、あなたの大いなるみ名を賛美します。あなたは、主イエスの功しによって、私たちをご自身のものとしてくださいました。それゆえ、わたしたちは、あなたのものであること、キリストが共におられることを誇って生きていくことができます。どうぞ、この最も大切な生き方をこの週も続けていくことができますようにお導き下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。